

高い櫓（監視塔）があり、銃を持った兵士が立哨していた。

ある日の早朝、監視兵が発した銃声が聞こえた。一人の兵隊が鉄条網のすぐそばで射殺されたのでした。彼は衛生上等兵で、おとなしい真面目な人で、私の下でいろいろな大変よく医務室関係のことをやってくれた人でした。そのころ彼は下痢ぎみだったのか、収容所の便所が満員のため我慢ができなくて、鉄条網の近くで用を足そうとしたのでした。ソ連の監視兵は逃亡を企てたものとみなして、注意のための威嚇射撃もなく、いきなり射殺したのである。

当方の吉田隊長はソ連側の所長に抗議をしたのですが、あまり問題にしなかったようです。

伐採作業、木材輸送、製材作業、貨車積みなどの重労働のため、過労の上に栄養失調が重なり、朝起きると既に冷たくなって帰らぬ人となっていた人たち、厳寒の中で思いがけない事故によって亡くなった人たちが、ことに収容所に入った当初はこのような気の毒な人が何人かおりました。

春化の部隊には、私と共に四名の軍医がおりましたが、一人は終戦後、吉林省敦化の病院で亡くなっておられ、一人は行方不明のままです。

とにかく、東京ダモイを夢見ながら、厳寒の地シベリアで尊い生命を失われた人々のことを思うとき、せめて立派な慰霊碑を現地に建てていただくことが大変意味深いことと思います。

いまだシベリアの地に眠る人たちの霊安かれと祈るばかりです。

シベリア抑留記

茨城県 塚口 毅 雄

私は、茨城県鹿島郡波崎町、漁師の長男として生まれ、勝浦実業学校を卒業し家事に従事しているさなか、昭和十九年三月、現役にて宇都宮四〇部隊に入隊しました。当時二十歳でした。四月、満州孫呉そんぐ一四部隊に回された。八月に部隊が移動し、残留として満州に残

り、残留部隊が結成された。十二月に入り軍速射砲部隊に転属した。

昭和二十年八月十日、ソ連軍が越境したので陣地に入る。戦闘器具は、弾はあっても銃はなし、戦車に対して爆弾を背負って飛び込む肉弾戦の状況であった。終戦は知らなかった。八月二十日過ぎ、戦争は終わつたと知らされ、武装解除になった。

解除され、司令部のある孫呉へ回され、收容所に行き、そこでシベリア經由で日本へ帰すと言われ、無蓋車に乗せられブラゴエシチェンスクへ着く。ブラゴエの空き家へ連れて行かれ、そこが收容所となり、自分たちで三段の寝床をつくり、満州からの占領物資の荷揚げ作業、雑役をさせられた。シラミで発疹チフス発生。当時五百人いた兵隊も、発疹チフスのため多くの方々が死んでいった。目の前で死ぬ。背の高さの穴を掘り、土の中へ埋めた。死者多数になったため、零下三〇度の中、火を焚いて土を暖め、大穴を掘ってまとめて埋める。むごい人の死を痛々しく肌で感じてきました。

厳寒の中、收容所より出て、製粉工場、パン工場と数を数えられて、彼らの言いなりに並んで雑役に通わされた。入浴はなし。衣類の消毒は熱湯で煮た。約八時間労働。ノルマは仕事により、人によって、パーセントによって、少々いたたく。一二〇%いただいたときは食糧が多く食べられる。衣類の交換はなし、着たまま。防寒外套一枚支給され、よく体がもってきたが、地獄の生活でした。

朝、三百グラムのパン一つ、コウリヤンのスープが飯盒のふたに一杯。昼は工場で食べる。パン工場ではパンのくず、製粉工場では粉を水でこねてポイラーで焼いて食べる。夜は、コウリヤンを塩で味つけしたものを飯盒のふたに支給された。今考えて思い出したことは、立派な体であったなあ、生き抜いてこられたのだから。当時は日本へ帰る話と食べる話で、ほかに話題はありません。飢えと寒さと労働を、何があっても帰るんだと乗り越えてきました。

ブラゴエシチェンスクにて帰還の知らせを受けた。貨車輸送でナホトカへ着く。船を待つ間ごろ寝して、

作業をさせられた。その時は強い力も出なかった。一週間くらい船を待つ間、「共産黨員になるか」と言われ、「ならない」と言うと言われ、乗船するときは体調をくずし、の言うとおりにした。階段登りはとてもつらかった。でも、帰れるうれしさに耐えてきました。船内で寝ていたが、食事に玄米のご飯を食べたのは忘れることができない。無我夢中であつた。舞鶴港は昭和二十二年四月であつた。着いてから舞鶴港でふろに入り、新しい衣類（軍服）をいだいて着用したときのうれしさは、骨身にしみて忘れられない。だけど、つらかつたことは思い出したくない。

私は帰還できましたけれど、亡くなった方々は気の毒です。平和な日本、平和な世界、戦争はなくしたいと切にお願いしたいです。

入ソ当時の記憶

埼玉県 兵藤 真三

終戦後五十年経っても忘れられない記憶として入ソ時の辛苦を思い浮かべ、酷寒のシベリアでロクな食事も与えられず、過酷な労働で生命を失った多くの戦友に対し、心からご冥福を祈る次第です。

一九四五年十二月ホルモリン五取容所三三二分所へ移動するまで経験もなかつたマイナス三七度は、いかに強烈な寒さであつたか。とにかく筆舌に尽くし難く、酷寒とはこんなものかと思ひ知らされた。支給された防寒外套はカシチョール（焚き火）の火の粉で点々と穴があき、中の綿が燃えていても分からない。特に足元は感覚がなくなり、防寒靴の先は焦げ放題。火にあたりながらお互いに焦げ臭い匂いがしたら注意し合つた。顔、頭は防寒帽で覆っているが、特に鼻だけは気をつけ、鼻先がローソクのような色になると凍傷、す